

2017年春季大会・一般研究発表要旨

共同体の存在

——ジャン＝リュック・ナンシーの哲学の展開をめぐる——

市川 博規

（立命館大学文学研究科 哲学専修博士前期課程二回生）

本発表は、ジャン＝リュック・ナンシーの哲学・思想の展開を検証するものである。その検証によってナンシーの共同体論が存在論として展開されていることを記述していくことをめざす。

現在、ジャン＝リュック・ナンシーという哲学者の主たるテーマとして広く認知されているものは、現代における政治的・社会的な問題だと思われる。そのなかでもとりわけ『無為の共同体』（*La communauté désœuvrée*, 1986）をはじめとする共同体をめぐる論者としてナンシーは知られているだろう。しかし、共同体論等の、政治、社会に関するアクチュアルな主題がナンシーにおいて見出されるようになるのは一九八〇年代以降であり、また著作や講演の数が増大し、現在までのように活動が活発化するのもそれ以降である。それ以前のナンシーはどちらかといえば堅実な文献研究者であり、著作や論文も政治・社会問題を取り扱うというよりはオーソドックスな読解の仕事が多い。おそらくこのような文献研究からの転換期とはその後のナンシーの思考および著作の方向性、スタイルを確立させた時期である。そして、この時期にナンシーにおける共同体論が展開され始めている。この転換期におけるナンシーの思考の背景をみていくことで、いかなる問題の領域として共同体が論じられているのか、その射程の確認をすることができるだろう。この共同体についての思考の背景には何があるのか、本発表では、ナンシーの共同体論の端緒と呼ぶべき地点を探り、ナンシーの共同体論の射程をはかることを試みる。具体的には、ナンシーは、彼の共同体論において共同体というものを概念として形成することを避け、共同体を存在として議論の対象としている、ということ論じていく。

発表の手順として、まずは『対向的共同体』（*La communauté affrontée*, 2001）を読解し、ナンシーが共同体について思考し始める背景をみていくことから始める。この著作でナンシーは共同体論に取り組み始めた当時を述懐しているのだが、共同体を存在論の次元で議論するという出発点があったということ、加えて、ジョルジュ・バタイユから共同体についての議論の姿勢を受け継いでいるということを確認していく。つづいて、『声の分割』（*Le partage des voix*, 1982）において共同体がいかなる文脈で問われているのかを確認する。ここで実際にナンシーが共同体を論じる次元を存在することの次元に設定し、ナンシー哲学における鍵語である「分有」という語とともに、共同体を存在論と不可分なたちで思考しようとしていることを確認していく。そして、つぎに『無為の共同体』において存在論としての共同体論がどのように展開されているのかをみていく。それによって、ナンシーによる共同体論の射程を再描していく。

出来事の地位をめぐる ——マリオン、ロマーノ、現象学の問い——

伊原木 大祐

かつてドゥルーズは、『意味の論理学』（1969）の中でルイス・キャロルとストア派を導きの糸としつつ、非物体的な効果としての「出来事」を論じ、その独特な地位を言語的な「意味」に関連づけて捉え直した。これ以降、「出来事」に関するテーマ系は、数学素を重視するバディウにせよ、脱構築を標榜するデリダにせよ、現代的思考の展開にとって欠かせない契機の一つになっているように思われる。では、このテーマ系をフランス現象学の枠組みに引き戻すならば、どのような議論が可能だろうか。

ジャン＝リュック・マリオンは、「現象学的三部作」の中核に位置する著作『与えられると（*Étant donné*）』（1997）以後、彼の構想する特異な現象理論——「与え（*donation*）の現象学」——の内部に「出来事」のカテゴリーを組み込んでいる。他方、クロード・ロマーノもまた「出来事」の概念を丹念に練り上げ、主著『出来事と世界』（1998）および『出来事と時間』（1999）の二部作を通して独自の「出来事論的解釈学（*herméneutique événementiale*）」を提唱するに至った。背後に相互的な影響関係が想定される以上、両思考における概念上の親近性は当然のことと言えるかもしれない。ざっと指摘するならば、出来事を因果律や充足理由律から解放し、その「予見不可能性」を強調する点、それと同時に出来事を新たな「可能性」の概念と結びつける点、「誕生」の出来事を範例として重視する点、出来事に対応する受け手の側を伝統的主体とは異なる項——マリオンによる「没頭者（*adonné*）」、ロマーノによる「到来者（*advenant*）」——に置き換える点、等々が挙げられよう。しかしながら、興味深いのはむしろ両哲学者の隔たりのほうである。というのも、同じ「現象学」から出発しながらも、まさにその「現象学」に対する考え方の違いによって、二人の出来事論の間に微妙な溝が生じているからである。両者を比較した先行研究においては、この溝がたんにフッサール寄りかハイデガー寄りか、あるいは現象学的か解釈学的か、といった図式で捉えられてきたふしがある。けれども、そうした単純な図式には解消しきれない問題が真の争点となっている。両者の出来事論を比較検討することで、この対立点を浮き彫りにするのが本発表の狙いである。

本発表ではまず、出来事の地位が「与えられたもの」としての諸現象の中でどのような地位を占めるのかを、マリオン現象学に即して検討する（1）。次に、ロマーノによる出来事概念の規定が、マリオンの議論に対していかなる特異性をもっているのかを考察した後（2）、最後の部分で、還元・世界性・事実性といった観点から両者の「現象（学）」観の相違を際立たせる（3）。

ジルベール・シモンドンのアナロジーについて

上野 隆弘

（大阪大学人間科学研究科博士前期課程）

本発表では、ジルベール・シモンドン（1924-1989）のアナロジー概念について分析をおこなう。とりわけ、シモンドンの主著と目される博士主論文『情報と形態の観念に照らされた个体化』*L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*（1958）における使用法を中心に考察する。个体化論や技術論に関する仕事を残し、ジル・ドゥルーズの思想に影響を与えたことで知られるシモンドンであるが、その思想は十分に汲み尽くされているとは言い難い。そうした背景には、シモンドンの用いる難解な概念群（「前個体的存在」、「ポテンシャル・エネルギー」、「情報」、「齟齬」、「内的共鳴」等）が影響していると考えられる。

その中でも「転導」と訳されることの多いトランスデュクシオン（transduction）は、シモンドン哲学の中核に位置する概念でありながらも解釈の余地を大に残している。おそらく、心理学者であるジャン・ピアジェに由来するこの概念は、一方では个体化という存在論的側面を示す概念でありながら、他方で当の个体化を把握する直観として、認識論的側面をも含意している。本発表が、アナロジーを扱う理由のひとつは、この概念の検討を通して「アナロジックな操作」と呼ばれるトランスデュクシオンについて考察できると考えるからである。

一般的にアナロジーとは、類似点に基づいて二つあるいは複数の項を結びつける思考様式とみなされている。そこでは、扱われる項が同一性のもとに考察されることが目指される。

本発表では、はじめにシモンドンがアナロジーをこのような意味で考えていないことを確認する。「個体からはじめて个体化を理解するのではなく、个体化からはじめて個体を理解する」シモンドンは、すでに个体化されてしまっている項を認めることはなく、それゆえ一般的な意味でのアナロジーを認めないからである。シモンドンによれば、アナロジーとは同一性のうちで差異を考察するのではなく、反対に差異のうちで同一性を考察することである。ここにはアナロジーに対する特異な思想が伺える。

本発表では、シモンドンのアナロジーに対するこうした考えが独自のプラトン解釈に基づいていることを示したい。シモンドンは前述した主著の補論でプラトンの『ソピステス』を取り上げ論じているが、本発表では、そこでの読解がシモンドンのアナロジー論、ひいては个体化論の構築に影響を与えていると主張する。そうした作業を通じて、これまで自然哲学とみなされることの多かったシモンドンの个体化論に認識論的側面を認めることが可能になるだろう。ソーカル事件以降、フランス現代思想におけるアナロジーの取扱いには、厳しい視線が向けられている。本発表の試みは、シモンドンのアナロジー論が備えている射程、現代における意義を明らかにすることにもつながるだろう。

最晩年デリダにけるハイデガーの遺産相続(1) ―『獣と主権者』第2巻と存在論的主宰Walten

大江 倫子

ハイデガーの講義録『形而上学の根本諸問題―世界、有限性、孤独』は、『存在と時間』刊行直後にあたる1929年度の講義であり、1983年に全集の第29/30巻として刊行された。この時期のハイデガーは伝統的形而上学に抗して、自己の現象学的存在論的思索を「形而上学」として展開している。ハイデガーはこの講義録の予備考察において、本来の自己への郷愁としての哲学を「世界、有限性、孤独」を問うこととして規定する。第1部では現代人の経験する根本気分としての退屈の分析から有限性と孤独において存在の思考へ向かう現存在が記述される。第2部では「石は世界をもたない、動物は世界に乏しい、人間は世界形成的」という本質立言から出発して、人間と動物の根源的差異の分析から世界の記述を試みる。この差異は存在論的差異の認識能力と結論づけられる。

デリダはすでに『精神について』でこのハイデガーの動物論を生物学主義的として論難したがその後その性急さを認め、『獣と主権者』第2巻では『形而上学の根本諸概念』の射程全体における動物論の位置づけを確認しつつ、ハイデガーの本来の意図としての存在論的思考の究明に忠実に、しかし動物との比較考察には依拠せずに世界、有限性、孤独を問うことを試みる。それはロビンソン・クルーソーとの比較考察による島嶼性としての世界規定である。デリダは両者の差異からその存在論的条件と歴運的条件の区別を顕わにしつつ島嶼性を生き物の普遍的世界の構造、すなわち「思考するために乗り越えなくてはならない構成された世界の境界」として規定する。ハイデガーは『物への問い』でカントの「純粹悟性の島」に言及しこの超克の道を存在への超越として提示しているが、デリダは他の方途で接近しようとする。それはこの構造を可能にしている存在論的主宰の力 Walten を分析することである。

このような世界を可能にしているのはハイデガーがピュシスの力としても例示する存在論的主宰 Walten である。デリダはすでに1989年の講演「ハイデガーの耳」で、ハイデガーの複数のテキストからこの Walten の分析を行った。それは異質なものを融合させずにそのものとして保持する力であり、贈与的特性と暴力的特性を併せ持つとされた。ここでも同じ規定をハイデガーの晩年の講演『同一性と差異』に沿ってより直接的に導き、存在論的差異を可能にするものとしてこれを特定している。また Walten の新たな特性として Austrag [定まり、耐え抜き] も導入される。さらに『形而上学入門』の『アンティゴネ』の読解から、Walten の暴力的特性について省察を深め、次年度の継続を約束するが急逝によりこの探究は中断された。

未開社会の経済学——ドゥルーズ＝ガタリとマルクスの共通項

木元 竜太

本発表では、ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』第3章の「未開人、野蛮人、文明人」を扱う。未開社会を歴史のない固定的な社会として捉えてしまっている従来の見方を、ドゥルーズ＝ガタリは批判する。むしろそこでは、部族間での交流を通じて絶え間ない経済活動が繰り返されており、未開社会は資本の流れに支配された、動的な社会だったのだという。本書は第1章の「欲望機械」から、マルクスの『経済学批判要綱』（『グルントリッセ』）、『資本論』、『経済学・哲学草稿』を頻繁に引用している。そこで発表者は、これらマルクスの著作が、ドゥルーズ＝ガタリの未開社会考察にどのようなかたちで影響を与えているのかを明らかにする。

より具体的にいえば、ドゥルーズ＝ガタリの「出自資本 capital d'alliance」、「縁組資本 capital filiatif」と、マルクスの「固定資本」、「流動資本」、「不変資本」、「可変資本」などの諸概念の関係性を詳細に分析することで、なぜ未開社会に経済的な動きがあるのか、ということを明らかにする。ドゥルーズ＝ガタリは未開社会における「負債 dette」の考察の重要性をしきりに主張するが、これを、マルクス経済学的な文脈での負債と接近させようとしているように見受けられる。さらに、『経済学批判要綱』では、遊牧生活、人類の土地所有（つまり領土化）、専制君主による人民の支配など、『アンチ・オイディプス』第3章を読み解く上で鍵となる、数多くの議論が展開されている。ドゥルーズ＝ガタリは最終的にマルクスの発展段階論を放棄し、彼ら独自の発展段階論を提唱することになるが、マルクスの歴史理論の大部分を受け継いでいる。

本発表ではまず、『経済学批判要綱』の生産のプロセスと照らし合わせながら、第1章「欲望機械」における生産、登録、消費（主体化）のプロセスを整理し、『アンチ・オイディプス』全体の経済理論の中核となる部分をおさえる。それを踏まえ、上記の考察を行う。また、本発表の狙いは、『アンチ・オイディプス』のマルクス的な側面を考察するのは当然のこととして、他にもある。それは、『ミル・プラトー』で、より鮮明になる種々の概念（コード化、公理系など）を用いた議論と、『アンチ・オイディプス』の議論を区別することである。というのも、あいだに『カフカ』などを挟み、8年も出版に開きがある両著の間での概念の揺らぎを観測するためにも、必要な作業だと考えるからである。

精神から生命へ——シャルル・ボネの心理学

沢崎 壮宏

シャルル・ボネはジュネーヴの博物学者である。アリマキの単為生殖を実証した昆虫学者として、蒸散の仕組みを究明した植物生理学者として、ポリプの再生実験を報告した生物学者として名を残している。しかし、もうひとつ、ボネには心理学者としての業績もある。フランスで観念学を、ドイツで精神生理学を準備すると同時に、メーヌ・ド・ピランへの影響も指摘されている。すると、心理学者としても大きな足跡を残しているわけである。だが、それにしても、フランス語圏では、ボネの心理学は真剣な研究対象となつてこなかったように思われる。『心理学試論 *Essai de psychologie*』（1755）の2006年版（L'Harmattan, Paris）には、依然、19世紀の論文（A. Lemoine, *Charles Bonnet : Philosophe et naturaliste*, 1850）が解説として掲載されているし、ロジェ『生命科学』にしても、ボネの心理学にまでは言及していない。

ボネの心理学がフランス語圏で無視されてきたことには理由がある。唯物論のレッテルを貼られてきたからであり、事実、『有機体論考 *Considérations sur les corps organisés*』（1762）はフランスで禁書に処されている。それに対して、ボネは、自分が唯物論者であることを否定しているし、唯物論を論難しているし、後には護教論を展開してもいる。とはいえ、ボネの心理学が唯物論に大きく傾いていることは疑いないと思われる。しかし、それなら、ボネが唯物論を斥けるために挙げている理由を斥けられるのか——しかも、ボネの心理学あるいは哲学の内側で。ボネは、非物質的実体の措定を余儀なくさせる理由を2つ挙げている——1) 心の能動〔注意〕、2) 心の単純さ〔人格の同一性〕。

われわれは、上の2つの理由の不十分さ、つまり、ボネの心理学が非物質的実体を必要としないこと、を明らかにする。心は本当に能動的なのだろうか。また、心だけが単純——多を孕みながら「一」を形成する——なのだろうか。ボネ自身の哲学に訴えながら、2つの問いに“否”と答えよう。というのも、心に具わる力をして非決定状態を脱させてくれるのは神経繊維の運動なのだから。心が動くにせよ、その動き方を決定するのは神経繊維にほかならない。また、判明な観念を抱く心は同時に複数の観念を抱く——多を孕む「一」——のでなければならぬとして、そのような「一」を実現する仕組みを調べられるのは心だけではないのだから。物体の有機組織化こそ、そのような「一」を実現させるための手続きにほかならない。

ドゥルーズとカント ——『差異と反復』における「内官のパラドクス」解釈をめぐる

多田 雅彦

本発表は、ドゥルーズの『差異と反復』の第二章「それ自身に向かう反復」において、時間論の文脈において論じられ、ランボオの詩句「私は他者である」とパラフレーズされる「内官のパラドクス」を、ドゥルーズ自身のパラドクスおよび記号・言語に関する理論を参照することによって明らかにするものである。内官のパラドクスは、その具体的な内実については本論に譲るが、思考の活動性が受動的・受動的自我に適用されることに関わるパラドクスであり、カントにおいては超越論的構想力を導入することによって解決されるとされる。ドゥルーズにおいては、彼の時間論の、ひいてはその哲学全体の根幹をなす「時間の第三の総合」、「時間の空虚な形式」が導入されるとき、デカルトのコギトに対するカントの批判に関わるものとして論じられる。そのときこのパラドクスは、解消されるべき矛盾としてではなく、積極的な価値を持つ形式として提示される。

こうしたパラドクスの積極性は、ドゥルーズが「憶見（ドクサ）」と位置付ける良識 *bon sens* や常識 *sens commun* への対立と同義的であると同時に、パラドクスがそれによって再定義されるところの、「意味」や「指示」といった意味論的規定と関わってくる。『差異と反復』は、それまで書かれてきた彼の哲学史的著作とは異なり、ドゥルーズが「初めて自ら哲学することを試みた」著作であり、かつ「時代の雰囲気」の中で書かれたものである。その意味で、カントが生み出したこの概念装置によって聴き取られるべきはドゥルーズ自身の声なのであり、問題はドゥルーズがそれをどのように使用しているのか、なのである。

本発表は、まずドゥルーズが『差異と反復』の第二章の、内官のパラドクスについての極めて簡潔な記述を、『純粹理性批判』の記述と対照しつつ、パラドクスの上述の意味論的規定から分析・解明する。その上で、特に同書の第三章で展開される、カントに見いだされる常識＝共通感覚をはじめとする「思考のイマージュ」への批判が、こうしたモデルを用いることによって、単なる否定的な批判に止まるものではなく、哲学の新しい創造の一環としてとらえられることを示す。

主要参考文献：

Gilles Deleuze, *La philosophie critique de Kant*, 1963, PUF ; *-Différence et répétition*, 1968, PUF ; *-Logique du sens*, 1969, Minuit ; *Critique et clinique*, 1991, Minuit. Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, 1998, Hamburg, F. Meiner.

contre-effectuationの二側面をめぐって

平田 公威

(大阪大学人間科学研究科博士課程後期一年)

ドゥルーズは、前期に区分される二つの主著において、超越論的領野に関する哲学の構築を試みていた。これらの著作の記述の大部分は、超越論的領野からの経験的次元の構成にあてられており、いかにして、われわれのこの経験的次元から超越論的なものを思考するのかが問われていた。特に『意味の論理学』では、超越論的領野に属する出来事が経験的な次元で実現することは、われわれの経験を構成することでありながらも、出来事の本性の失墜として語られていた。こうした理由から、静的発生と呼ばれる経験的なものの発生は、ある一面において避けられるべきものとみなされてきた。こうした点を踏まえ、しばしばドゥルーズ研究では、静的発生に対する技法として contre-effectuation という概念が着目されてきた。この概念は、超越論的なものへと向かう操作として描かれており、静的発生とは逆の方向性をもつためである。事実、最晩年の主著『哲学とは何か』では、哲学による概念創造とともに、contre-effectuation が論じられているように、その重要性は疑いえないだろう。

しかしながら、はじめて contre-effectuation が提示された『意味の論理学』では、その二つの種類が区別されている。「contre-effectuation だけを操作して、到来することがありえたかもしれないことに値すると称するとき、それは道化役者の contre-effectuation である。しかし、実際に到来することのパントマイム師であること、実現に contre-effectuation の裏地を張ること、これこそが、[……] われわれに対しては、信じられなかったほど遠くに行くチャンスを与える」(Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minit, 1969, p. 188/小泉義之訳、河出書房新社、2007年、上巻280頁)。ここでは、実現を伴うか否かで contre-effectuation の二つの側面が区別されており、パントマイム師に属するものは肯定的に、道化役者のものは否定的に提示されているようである。contre-effectuation の重要性は確かだが、この概念が二つの仕方でも語られていることを看過することはできないだろう。

本発表では、この二つの側面に着目し、contre-effectuation の再考を試みる。第一に、『意味の論理学』における実現と表現の理論を再読し、contre-effectuation が何をねらうものなのかを明らかにする。第二に、道化役者の contre-effectuation になされる批判と、所与における実在性を超越した〈私〉を受肉するイロニストに対する『意味の論理学』の批判を重ねあわせることで、問題点を浮き彫りにする。そして最後に、ドゥルーズが静的発生の技法として提示していたユーモアと実現に伴うストア派の倫理としての表象の使用に着目し、これを contre-effectuation の議論へと送り返すことで、その肯定的な側面を描き出す。本稿では、こうした読解を通じて、contre に担われた二重の意味を、一方は実現への対抗の「反」として、また、上野修「意味と出来事と永遠と」『ドゥルーズ／ガタリの現在』小泉義之、鈴木泉、檜垣立哉編、2008年、36頁で指摘されているように、他方は、実現に伴うものあるいは準ずるものとしての「副」とする解釈を示したい。

狂気の呼び声 ——フーコーの超越論的考古学とその自己解体——

藤田 公二郎

本発表は、前期ミシェル・フーコーの思想を取り上げ、そこに見られる哲学的思考の運動をその概要において理論的に再構成しようとするものである。この試みによって、その哲学的思考の運動の内にひとつの重要な理論的契機、すなわち「狂気の呼び声」とでも言い得るような契機が存在していることを指し示したい。

前期フーコーの思想は一般に、「考古学」と呼ばれる歴史研究のかたちをとって展開されたと言える。最初の著作『狂気の歴史』では精神医学の考古学が行われ、続く『臨床医学の誕生』では臨床医学の考古学が行われ、さらに『言葉と物』では人間諸科学の考古学が行われた。そして最後に、それら全ての成果を踏まえて、考古学という方法論自体についての理論的考察が『知の考古学』にまとめられたのである。それゆえこれまでのフーコー研究では、前期の思想を哲学的に理解するにあたって、その『知の考古学』を重要な手引きとすることが多かったように思われる。しかし実際のところ同著においては、フーコー自身が明記しているように、それ以前までに実践された考古学をたんに理論的に語りなおすというよりは、むしろ、その仕事から出発して新たに考古学を練り上げなおすことが問題になっていた。したがって『知の考古学』の考古学を、それ以前までの考古学と単純に同一視することはできないのである。

実際、当初の考古学は、後に『知の考古学』で厳しく批判されることになる近代哲学の理論的枠組みに、多かれ少なかれ、囚われ続けていたと言えるだろう。そもそも「考古学」という用語自体が、実のところ、フーコー自身がある小論の中で打ち明けているように、近代哲学の祖、カントの『形而上学の進歩に関する懸賞論文』から借り受けたものにほかならないのである。考古学とは本来、形而上学的ないし超越論的なものの目的論的進歩、いわゆる「超越論的な歴史」のことなのだ。フーコーはこの歴史を、カントの超越論的哲学の発展版、フッサールの超越論的現象学（あるいはサルトルやメルロ＝ポンティの現象学）を通じて引き継いだと言えるだろう。とはいえフーコーは無論、そうした近代哲学の理論的枠組みに安住していたわけではない。彼は、その伝統的な枠組みから出発しながらも、ハイデガーやニーチェの哲学（あるいはブランショやバタイユの思想）を経由することで、その枠組み自体を解体するべく自らの仕事を展開したのである。

したがって前期フーコーの思想は、『知の考古学』の考古学というよりも、むしろ超越論的な考古学であったことが示されなくてはならない。そしてまたその考古学は、自己解体的な仕方で開催されていたことが示されなくてはならない。本発表では、そうした哲学的思考の運動を概観してゆき、そこに「狂気の呼び声」という理論的契機が潜在していることを指摘したい。

初期レヴィナスにおける「運動」の困難

堀松 辰彦

エマニュエル・レヴィナス（1906-1995）は、ハイデガーによって再興された存在論に対して特異な立場をとりながらフランスで活動したりトアニア生まれの哲学者として知られている。レヴィナス初期の小著『実存から実存者へ』（1947）では、「存在の悪」という考えが提示され、「〈善〉を存在の彼方に位置づけるプラトンの定式」が研究の指標とされていた。また、レヴィナスが存在論に対する倫理の優位を主張したことはすでに周知の事実になっている。レヴィナスは存在論と格闘しつつ、その彼方の〈善〉や倫理へと向かっていったのである。

またその一方で、レヴィナスは初期の時点から人間の心身の問題についても強い関心を払っていた。実際、レヴィナス初期の論考「ヒトラー主義哲学に関する若干の考察」（1934）や「逃走論」（1935）では、われわれが自身の身体に繋ぎとめられているという身体と人間性についての考察が重ねられていた。しかし、これらの論考が問題の解決を見出せず困難に陥っていた点もすでに複数の論者によって指摘されている。

そこで本発表ではまず、初期のレヴィナスが心身の問題に関して陥った困難が「運動 *mouvement*」というカテゴリーに属するものである点を指摘したい。「運動」というカテゴリーは、古くはプラトン『ソピステス』篇で五つの最大類のひとつに数え上げられるものであり、レヴィナス初期の『実存から実存者へ』でも「実存者を〈善〉の方へと導く運動」という当時のレヴィナスの研究主題として提示された表現において、存在と善を媒介するものとして登場していた。まず心身の問題に関しては、「運動」の困難はわれわれの身体への繫縛の「終身性 *inamovibilité*」という語によって要約されることになるだろう。

次に、さらに「運動」をめぐる、レヴィナスが初期のいくつかの論考において合計三つの異なる困難を提示しており、『実存から実存者へ』という著作においてそれらの困難がまとめて検討されたのだと論じたい。その困難は、挙げるならば、先に述べた心身の問題の他に、過去の問題と「ある」と呼ばれる状況の問題に見出されるだろう。『実存から実存者へ』においてそのそれぞれの困難に暫定的な解決が与えられたということを示すが、われわれの第二の課題である。

終わりに、『実存から実存者へ』とほぼ同時期のレヴィナスの講演録『時間と他なるもの』を参照しながら、『実存から実存者へ』における解決の妥当性を検討することにしたい。特に、『実存から実存者へ』の時間論の不十分さを示しつつ、そこから『時間と他なるもの』の他者論へと接続を試みるのがここでの作業である。つまり、『実存から実存者へ』の解決を確認した上で以後の思想への動機を探ることが最後の課題になる。

自己・異他触発と一人称の発話 —— ジャコブ・ロゴザンスキにおける声の問題

本間 義啓

デリダによれば「自らが話すのを聞く」瞬間としての現在には根源的な仕方では非現前、他性、死が穿たれており、自己の聴声において私自身であると思うことは幻想でしかない。このデリダのテーゼに対してロゴザンスキが留保をつけるとしたら、それはデリダが自己の聴声を幻想に還元するからではない。現前の形而上学批判は自らの声を聞く主体のエゴの廃位を主張することによって、自己の聴声において自らを失うエゴの生を論究することを可能にしないからである。自分の声を聞きながら、それを自分のものであると思うのが幻想であるとしても、この幻想の最中にある自己性をエゴの生の問題として分析する必要があるのだ。どのように、なぜエゴは自らのものではない声を自らのものとみなすのか。いかにして自己の内に異他的な声が響き、その聴取はどのように自己を幻想、非真理として生かせるのか。声によって自らを失い、自らを失いながらも生きるエゴの自己構成を分析すること、これがロゴザンスキのアプローチである。本発表の目的は、聴声という観点から、ロゴザンスキの自我論の展開を解釈することにある。以下、概略を記す。

1) 『法の贈与』において声の問題は、「法の声」という法の現出様態の考察の中で論じられる。法は主体が従うべき命令文として聴取され、この法の現出は常に非真理の影を纏うとされる。たとえばヒトラーの声に対して、それが法であるかのように従うアイヒマンにおけるように、法は聴声において、自らの非真理として現出するのだ。2) 『デリダのクリプト』を経て『自我と肉』に至って、ロゴザンスキは、聴声における非真理の問題を、デリダの「自己異他触発」を批判的に読解することによって、エゴの自己構成の問題として論及する。「自分が話すのを聞く」ことは、「自分を呼ぶ能力」、一人称で語る能力において考察され、幻聴はこの能力の否認に起因すると言う。もし自己の内に異他的な声が聞こえるとしたら、それは自らの声を自分のものとして聞くことができず、他者の声のように聞くからである。自らを呼ぶ能力の否認に起因するエゴの真理の歪曲、これがロゴザンスキが分析する問題である。3) なぜ主体は自らのエゴを否認するのか。あるいは、なぜ人は誰かにその人のエゴの真理を裏切るよう強いることがあるのか。『彼らは不当に私を憎む』においてロゴザンスキは、自己によるエゴの真理の否認を、他者によるエゴの真理の歪曲の分析から考察している。問題になるのは、エゴの一人称の発話を歪曲する他者の声の聴取の構造である。たとえば、エゴの真理を自ら否認するよう強いる他者の声に服従しているのなら、主体が一人称で自らを語るとしても、自らのエゴを肯定する主体の発話は自らの真理を歪曲するものでないからである。

「高邁 (générosité)」の情動的側面の研究

三上 航志

本発表は、デカルト最晩年の著作である『情念論 (les passions de l'âme)』(1649)を基本的なテキストとして、その中で展開されている「高邁」概念の解釈を行うものである。「高邁」とはデカルトの倫理学・道徳哲学において中心的な役割を果たす概念でありながら、『情念論』においては非常に複雑な外延をもった概念として規定されているため、容易には理解しづらい概念となっている。事実、その情動的な側面に焦点を当てるならば、「高邁」とは「驚きの情念 (passion de l'admiration)」の下位種 (第54/149-153項) であると同時に、自身をもつ確固とした決意の「感覚 (sentiment)」でもある (第153-154項)。また、精神の内に精神自身のみによって惹き起こされ、動物精気の運動には依存しない、「内的情動 (émotion intérieure)」(第147-148項) でもあるといわれる。このように、「高邁」とは、その情動的規定を取り出してみても、複雑な外延を持った概念であることが理解できるだろう。

このような諸々の規定を統合的に解釈するために、まずは『情念論』第一部に立ち返りたい。ここにおいてデカルトは「情念」「感覚」「情動」といった基本的な用語を定義しているからである。カンブシュネルによる詳細なコメンタリー (*L'Homme des passions*, 1995) だけでなく、アルキエによる解釈 (*Œuvres philosophique*, 1973) も適宜参照しながら、『情念論』第一部の構成を明らかにし、デカルト的用語法の明確化を試みる。

以上の考察を通して本発表で強調しなければならないことは、第一に、「情念」と「感覚」の線引きをめぐる問題は、心身合一に由来する思考を、「心」の側から弁別するのか、「身体=物体」側から定義するのかによって、大きく回答が異なるという点、第二に、「内的情動」は「感覚」や「情念」といった思考とはレベルを異にするものであるが、この「内的情動」を引き起こす契機をあたえる道徳的「判断」と「感覚」の間には密接な関連があるという点、第三に、「高邁な精神」がもつ情動的側面は、時間軸を導入することで十全に解明されるという点である。

第三点目に関しては、「高邁な精神」が持つ「決意 (résolution)」の有り様に着目し、経験的發展を指摘する解釈が、カンブシュネルによって既になされている (*Descartes et la philosophie morale*, 2008)。本発表は、この時間的發展というアイデアをさらに膨らませることで、「高邁な精神」が持つ情感的側面を解きほぐそうとする試みである。

バタイユ、ハイデガー、ナンシーにおける根拠の問い ——『無為の共同体』に基づいて——

横田 祐美子

本発表の目的は、ジャン＝リュック・ナンシーの『無為の共同体』（1986年）を出発点に、ジョルジュ・バタイユ、マルティン・ハイデガー、そしてナンシーにおける根拠の問いに焦点をあて、この三者の思想から読み取れる根拠がどのような特性を備え、根拠が根拠として生じてくる事態を彼らがどのように思考しようとしていたのかを考察することである。

周知のとおり、同書はナンシーの共同体論が展開された主著であり、そこでの参照軸としてバタイユとハイデガーの思想が挙げられている。両者の思想は、第2部「途絶した神話」でナンシーが「私はハイデガーとバタイユを、一方を他方によって書き換えるだろう」（Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1990[1986], p. 150）と述べているように、共通の問いを有するものだと考えられていた。この文脈においてナンシー自身がバタイユとハイデガーのうちにみているものは「特異性 [singularité]」の問題であるが、本発表ではそこから一步踏み込んで、根拠の問題へと目を向けたい。なぜなら、ナンシーにとって「特異性」とは「基底 [fond]」、それも底のない「基底」である「深淵 [abîme]」に深く関係づけられたものであるということが、同書第1部において論じられているからである（Cf. *Ibid.*, pp. 70-71）。したがって、ナンシーの「特異性」は、根拠の問題系にその名を連ねるものであり、そうである以上、彼が「特異性」に関する共通した問題を読み取ったバタイユとハイデガーの思想においても根拠が問われていると考えられる。

ハイデガー哲学において根拠の問いが存在することは自明であろう。バタイユに関して言えば、彼の鍵語である「未知のもの [l'inconnu]」は「諸世界の基底 [fond des mondes]」（Georges Bataille, *L'expérience intérieure*, in *Œuvres Complètes*, t. V, Gallimard, 1973[1943]）と言い換えられ、あらゆるものの根源のように語られている。ここに、バタイユにおける根拠の問いを見出すことができるのだ。

本発表は、『無為の共同体』においてこれまでほとんど注目されてこなかった根拠の問題を、上述した観点からバタイユとハイデガー、そしてナンシーという三者それぞれの思想において検討することで、彼らの近さと遠さを明示する。ひいては、単なる共同体論に終始することのない同書の新しい読み方を提示することを試みる。

「老化」と「個性」 ——ベルクソン『創造的進化』におけるル・ダンテクへの批判的考察を通して——

米田 翼
(大阪大学)

アンリ・ベルクソン(1859-1941)は、『創造的進化』(1907、以下EC)において、「生物」(≠生命)を、「持続の間隔そのもの l'intervalle même de durée」と定義している(EC 22)。本発表では、この論点を理解するために、ECで参照される生物学者の一人フェリックス・ル・ダンテク(1869-1917)との比較を通して、ベルクソンの「老化vieillessement」についての議論を考察することを主眼とする。

まずは、なぜここで「老化」が問題となるのかについて確認しておこう。処女作『意識に直接与えられたものについての試論』(1889、以下DI)では、持続の不可逆性が認められるのは、意識的事象のみであり、有機体にかんしては留保が加えられていた。ところが、ECにおいてベルクソンは、有機体の持続の不可逆性を留保なしに認めている。そして、その具体相をなすものとして、「老化」という現象、とりわけ、その不可逆性をめぐる問題が焦点化される。

ところで、現代の常識的な科学観では、「老化」の不可逆性は自明だと見なされているが、EC出版当時には、「老化」を可逆的な現象として理解する立場が存在した。それゆえ、ECでは、この可逆的な老化論を批判的に考察することで、ベルクソン自身の立場が明確化される。ECで参照される『個性性と個体主義の誤り』(1905、以下IEI)の著者ル・ダンテクの老化論は、この文脈できわめて重要な準拠点となる。

IEI第二章「なぜひとは老化するのか」においてル・ダンテクは、生体維持に不要となった物質の「被覆encroûtement」を「老化」の本質的な原因と見なす。そして、「老化」の原因となる物質が除去される「脱皮mue」のような現象によって、被覆以前の状態を回復することを、ル・ダンテクは「若返りrajeunissement」と呼ぶ。IEIが生物学の観点から「個性性」という概念を批判的に考察することを主眼とする著作であることから推測できるように、ル・ダンテクは、「老化」という現象の分析を通して、時間において生物の「個性性」が同定できるか否か、を検討する。そして最終的には、「脱皮」に類する契機が存在しない高等動物においては、「老化」の不可逆性と同時に、時間において「限定された持続une durée limitée」が認められる。

本発表では、(1) IEIにおけるル・ダンテクの理論体系を検討した後、(2) ル・ダンテクの理論との比較によってECの「老化と個性性」におけるベルクソンの「老化」のモデルを再構成する。また、(3) これらの作業を通して、「持続の間隔そのもの」というECにおける生物の定義についての解釈を示す。最終的に、(4) 「生命一般」と称される進化論的な水準ではなく、「個体」として「生物」の水準において、ベルクソンの「変化」の哲学を定式化することが本発表の目指すところである。